



第3分科会

第1分散会

I はじめに

協力者 研究協議の場として、自己の実践を磨き、明日からの励み・指針となりますよう、分散会を共に創っていきましょう。

進路保障は同和教育の総和と言われます。たくさんさんの教育内容を扱いますが、全国各地で課題や実情も違うということを利用して、4本のレポートをもとに、多様な視点・視座からの協議を進めていきましょう。本分散会のキーワードは「今とこれから」です。捉えようは様々ですが、これまでの培った豊かな同和教育の営みをもとに、未来を切り拓いていく「今」と「これから」を大いに語り合しましょう。

研究協議の場なので、伝えたい思いや受け会場で共有しよう。また、小さな質問など何でも聞いてほしい。初めて参加した方々の疑問に分散会全体でいねいに応えていきましょう。

この後、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

(1日目)

－報告3－①

「試験を受けた生徒、後に続く生徒のことを考えると、このことを適切に会社に伝えなければならないと思っています」～特別支援学校における「言わない、書かない、提出しない」と追指導の取組～
(熊本県人教)

－主な質疑と意見－

京都 追指導を京都でも支援学校で、その後どうしているかを交流する場がある。熊本ではどういった取組があるか？

報告者 熊本では原則3年間、主に進路指導主事が年3回訪ねている。県内すべての支援学校が行っている。卒業して終わりではなく、その後もつながっていくことを同和教育で教えてもらった。

内容としては、知的障害の子どもたちが相談相手を作れなかったり、孤立するケースが見られる。その場合、事業所や本人から連絡がきて、会社と本人との一緒に問題の解決に入る。

鳥取 支援学校での進路保障の取組、また、違反事

例に対する取組は全県で進められているか？鳥取では、売り手市場と言われているが支援学校への求人は厳しい現実がある。その中で企業の違反質問として挙げることは勇気のいることと思う。企業も受け入れて A さんががんばっているということはすごいと思う。また、子どもたちは、違反質問を許さない取組の内容をどのくらい理解をしているのか？

報告者 他校の取組については把握できていない。本校の事例については、県内の特別支援学校の進路指導主事会の連絡会議で報告をした。また、情報発信としてこの進路保障の授業の取組についても紹介した。企業から求人をもたらすのは大変だが、違反質問があって、それを挙げないという選択肢は自分の中にはない。そのままにして黙って合格させると、人権感覚のない職場で子どもたちがしごとをしなくてはならなくなる。だからこそ、企業と学校は対等な関係でなければならないと思う。合理的配慮は当然必要だが、人権問題のところで、だめなことはだめと事前に伝えておかない。「何でも学校は企業の言うことを聞いていきますよ」というのは、きちんした対等の立場にはならない。

今年度初めて求人票が2通届いた。しかし、自分としては現場実習をしなくても高校と同じ仕組み(求人票)で就職できるようにしなくてはいけないと思っている。9月16日に就職活動が開始されたが、支援学校の高等部の子どもたちは、就労をかけた現場実習をまずしなければならない。だから本校も今、ようやく、履歴書を書いて、12月になって受験となり、そのようなギリギリの中で決めていく状況がある。支援学校の理解を深めるためにもっと打ってでていかないといけない。

違反質問の理解度は、発言ができる子については積極的に意見を言ってくれた。全ての子どもたちの理解の検証はできていないが、集団の中で、「このことはおかしい」という他の人の意見を聴く授業(取組)は、大切な学びのひとつではないかと確認している。

広島 B 社が問題意識なく質問したことが出発点となるが、B社自体、また、ハローワーク等がこの課題をどのように整理したのか？また他企業にも取組は広がったのか？周りの教職員は、違反事例に対する意識の違いはあったのか？校内の研修等の取組を教えてください。

報告者 B社の指導の内容については、挙げた時点でハローワークが動いた。以後、ハローワーク主催の研修会等には積極的に参加する旨を聞いた。また、この件以降、採用選考前に求人票のやりとりを企業とするので、違反質問を起こさないように綿密な話し合いをしている。また、地域の中でも研修会を行っている。県内の特別支援学校では「違反質問に対してどうするか」という論議はあまり進んでいないように思う。自分はよく分からないというのが実情。

校内では、今回あったことをまとめて「職員だよ

り」も発行した。他校の状況はよく分からないが、県大会では、違反質問についての論議を聴いた。

この「言わない、書かない、提出しない」という精神が、子どもの進路を保障するということだと思う。ひとりの活動にはなるかもしれないが、少しずつ拡げていきたい。

－意見交流－

福岡 周知・啓発の活動はどこでもやっていると思う。しかし、人権感覚のアンテナが立っていないところに届かない、響かないということが大きな問題だと思っている。その場所に、いかにして拡げていくか、この分散会で聞いていきたい。

－報告3－②

「それでも、社会に出るのも未来も楽しみです」
(大阪府人教)

－主な質疑と意見－

鳥取 ①高校との交流はどのようにして行っているのか？②「私の水平社宣言」の取り組みは、大阪では盛んなものなのか？独自のものか？③高校生の発言にある「帰化」という言葉、きわめて差別的な意味が含まれている。中学生には「日本国籍取得」という指導はあったのか？

報告者 ①出会いの学習は、机上の勉強よりも当事者の方の声を聴く、一緒に遊ぶ、触れ合うということ大切にしている。高校の交流に関しても、毎回学年で話しあっている。中心にAを据えて、Aが変わるように考えてきた。②「私の水平社宣言」は地域独自の取り組み。特に、100周年という節目を大切にしたい。③帰化という言葉の意味を生徒は知らなかったので事後指導を行った。

大阪 長南中学校の人権担当。実際にコリアタウンで出会いの学習を行いたかったが、高校と交流することになった。やはり1年生の部落問題学習で生徒が大きく変わった。Aの今の様子を追指導している。オープンスクールがありAの母親と出会った。高校で楽しそうに過ごしていること、Aが前を向いて進んでいることを嬉しく感じた。

協力者 「私の水平社宣言」について「語る」が当たり前のようになっているが、実はすごく難しい取り組みだ。「何をもとにしてどんなことを語っていくのか」を具体的に教えてほしい。

大阪 水平社宣言は難しいので、そのまま伝えても意味がわかりにくいと思う。前の人権担当が、子どもにわかるように通じるように、今の言葉に変えて、自分の気持ちを出せるようにした。生徒は

その言葉を聞いて、自分の思いを語れるように取り組んできた。だから、ウチは独自でやっているということ。

大分 ①人間関係がうまくいっていない生徒の様子や人を傷つける発言があったら高校では生徒指導の対応をすることがしばしば。「人と人がつながる、関係をつくり直す」ことについて、人権学習・同和教育が「とても力がある」と感じた。何をもって自信をもってこの実践に取り組んだのか？を教えてください。②高校に進んだ彼らがまわりの子とどうつながっていきけるのか？高校との連携があれば知りたい。

報告者 ①対面して謝罪しても根本的なところが変わらないと解決にならない。背景を理解したうえで、自分を理解して人を認めていけるようにするには、やはり人権学習が一番大切な取り組みだ。子どもたちが思いを語れるようにするには、まずはおとなから。私自身もルーツを話し、他の教員もお互いが打ち明けて、議論も重ねた。最後は子どもたちを「信じること」が一番大事だと思う。取り組まない学校も多いが、まず子どもたちを信じて実践して、もし何かあればそこを出発点にして取り組みをつくる、その繰り返しだと思う。語ることが最終目的ではなく、語らないことも尊重した。でも最後は仲間にも心をひらいてほしい、自分の思いを出せる子になってほしいと思う。②高校とのつながりに関して、卒業後も地元で話せる仲間がいる、帰れる場所(職員室、先生)があるなど、「安心できるつながりをつくる」ことが大切だ。Aが「社会にでるのも楽しみ」と言えたのも、Bや受けとめてくれた仲間や学校が、安心できる場所になったから。高校と連携を密にしている。

奈良 語ったあとに周りの子からの返しを通してみんながつながっていく姿があると思う。どんな返しがあったのか教えてください。

報告者 語った後は感想をそれぞれ書いて思いを返す場をつくっている(生徒も保護も)。ただ、語った後の返しも大事だが、私は「語るまでの過程が大切」と考えている。語ろうと思ったら【そのことを理解して受け入れて人に話せるまで考えて最後に勇気を出して伝える】というその過程がとても大事。返しを怖いと考えることもあると思うが、聴いてる側もそれでもその語っている姿を見て「じゃあ、今度は自分も語ってみよう」と思う。また、聴くことでその子の背景を知って「自分にも見えてないことがあった」「もっと学ぶことがある」「その

子もがんばっているから自分も」という効用がみられる。

大阪 語るの部分で質問がある。2の場面で、1年生最後の部落問題学習では、地域の方が自身の差別体験について話した。すると同じ町に住んでいる生徒が次々と自分の思いを語った。これがとても大事なポイントだと思う。【なぜ被差別の方が語った後に、同じ町に住む生徒が次々と語れたのか】仕掛けを知りたい。

報告者 小集団から順に大きな発表機会を用意してまずは経験を重ねていく。

大阪 小学校から私も関わらせてもらって系統立てて語れるようにしている。顔見しりになる、出会いも大事、うちの工工ところを紹介している。すると、【こんな工工こともあるこの町が、なぜ差別されなアカンねや】と気付く。まわりの子も気付く。だから胸をはって「この学年やったら話せる」となっていた。地域の良い面がたくさんあると意識付けられたら、「何で差別されなアカンねや」という言葉がみんなの前に出てくる。出てきたらまわりの子が気付いて、「自分らが考え直さなアカンな」というふうの流れが変わっていく。そういうことをしている。

協力者 とても大事なことが討議されている。「なぜ次々と…顔をあげて語ることができていくのか」ということに関してさらに深い議論を、次の討論でもお願いしたい。

－2本のレポート受けての討論－

愛媛 行政職です。自分を語る場面、差別は社会の問題。社会の問題をどのようにしてなくしていくのか。自分の事として考えるためには、自分を語る→行動だと思う。受け止める土台が必要。何が大切なのか。自分の自尊感情が大切なのは、自分を認めてもらえる環境、自分を誇りに思える。ずっと積み重ねがある。受け止めてもらえる安心感。変容が見られた。彼らは差別をなくす主体性を持った。自尊感情を持たせる仕組み。

報告者(大阪1) 自尊感情と一緒に遊ぶ。職員と遊ぶ。わかろうとする姿勢は大人を見て試している。部落問題学習だけが突破口ではない。子ども主体に据えた学習を、悩んでいる子どもの自尊感情を育てる。

兵庫 元気をもらった。教員を退職。「語り」は本人が強くなる、聞いた人が優しくなる。そこに障がい、自分のことを表現できない子もいる。周りの子ど

も達の行動に対してわかってもらえる。元気をもらっている。私の子は特別支援学校に通った、中学ではいじめられた。進路は特別支援学校に行った。追指導はなかった。4度目の会社。周りの子達の優しさを感じたらしんどさを乗り越えられる。

滋賀 特別支援学級の担任もした。校長です。地域の校長は常に心配されている。滋賀には(知的の)特別支援学校がない。高校に行くしかない。家庭との相談。高等養護学校。選択枠がある。高校卒業資格は高校に行くしかない。特別支援学校では高卒資格はもらえない。外国にルーツを持つ子は就職する際に、名前が本名記載のためどうするか。定住権のない子は就職できない。

広島 (滋賀の方へ)事実を確認して答えた方が良い。

奈良 今年から人権担当。中学生。研修中に思ったこと、差別や人権問題、今まで見えなかったものが見えなかっただけである。新しいものではない。なくなったわけではなく、見えなくなっただけ。学校生活よりも社会生活のほうが長い。人権問題にこれからたくさん出会うであろう。語る取り組みは素晴らしいと思う。今年から何となく語っていたことから、後世の先生方が取り組みを続けられるようにしないと誤解を与える。「何も語ることがない。」という生徒もいる。自分の「当たり前」に気づいてほしい。身近なところに人権課題がある。ゴールの定め方。

鳥取 子どもらの卒業後もつながっている姿、鳥取が大切にしてきたことが吹っ飛んでしまった。立場宣言がない、仲間づくりもない、再構築していきたい。学ぶために大阪に通っていた。「私の水平社宣言」の取り組みに出会った。立場宣言していく、つながっていく、全国大会(福岡)で、教師たちからの報告に衝撃を受けた。結局自分自身の差別性をめくられてきた。子どもたちだけではなく自分も語る。とても大切な視点。教師の立場宣言。次の学校でも大切にしてきた、取り組みが広がったのは差別発言が起きたとき。教師が諦めてしまったら終わってしまう。子どもたちの変容をこれまでたくさん見てきた。

大阪 「自分なりのゴール」振り返ったとき担任した子のことを思い出す。不登校気味の子が修学旅行に来られない、その子から言われたのは保護者が重度のアルコール依存症「自分が就学旅行に行ったら、母ちゃんがどうなる？」福祉に繋がり4年掛かって家庭に繋がった。卒業後も通ってくれた。

美術の専門学校に通ってイラストレーターになる。社会に出たときのゴール、自分の持ち味を活かした人生、自分に誇りを持って歩いていく、子どもに対する願いを持っている

奈良 補足、本校の現状としては「言葉遣いが荒い」「手が出る」。背景は生活環境が厳しい、親が家庭にずっといない生活、寂しさから来る行動、親の愛情がない、暴言を吐く、語ることのゴール、助かるための力、集団の中で助けてと言える力が語ることのゴールではないかと思う。語れる集団を作っていくことの大切さ。

大阪 チームで頑張ってくれている。信頼関係が大切、一人ではできない。子どもたちも先生が仲良くやっているから信頼される。25年前はひどかった。差別発言でうろたえる、でもうろたえなくて良い。差別した方のケアが大切。この子の何が弱いことなのかを知る必要がある。

大阪 チームでやっています。語ることのハードルは高いと思われている。高いハードルに対して階段をつけること、小学校1年生から部落問題学習をやっている。子ども園からやっている。就学前からのなかまづくり、地域の誇りを語れない学年もある。その時は中学校へ引き継ぐ。課題は「先生、生徒が変わるとうまくいかないことがある」。ゴールは「差別はあかんでおかしいで」と思える子どもに育てほしい。

広島 語ることのゴール、自分の考えと違うと思っていたけど、先程の発言が自分とマッチした。ゴールは「差別をなくすこと」。部落の子を担任したとき、活動から逃げていた子を追いかけていた。では自分は解放運動に関わっていたかと言うとそうではなかった。自分が差別をなくす主体者になっていなかった。学び続けること。報告者(大阪1)さんの自信の根拠がわかりました。人とのつながりがありました。

報告者(大阪1) 部落問題学習はどの学校でもやること。最初はイメージできなかった。語らせることのリスクを考えていた。自分が実践できたのは周りの人のおかげ、次の学校でも自信を持って人権学習をやっている。語る取り組みで、語ることはないという子どもは多い、言語化できない、無自覚、第1段階の向き合うことが大変だと思う。教員の向き合い。最後は本質的に語らせることを目指す。3つのことば、「①寝たこと正しく起こす」「②微力だけど無力ではない」「③差別しないのではなく、なくす→しないのは当たり前」。ゴールのイメージ、自

分は「差別への怒り」がゴール、当事者でない側、なかま、無関係のことでも怒りを持つ。

【1日目まとめ】

協力者 2本のレポートから「語る」ということを中心に、たくさんの協議がなされたが、自身の実践と重ねながら、協議に参加していた。

受験を目前に控えた中学3年生と「違反面接」の授業をした。家族構成の面接の質問に、すぐに「プライバシーの侵害」だと気付いた子どもたち。自分が思っているよりも、人権感覚がするどく、その時代性にも気付かされた。部落問題について、差別が見えなくなったと言われるが、インターネット上では、差別の書き込み・映像がアップされるなど、時代に応じた部落問題学習が必要であり、常にアップデートし、差別に気付く感性を鋭くしなければならぬ。

また、中学1年生と「性の多様性」について学習をした。生徒のなかには、「同性に魅かれる」、「異性の服装を着用してみたい」という気持ちを正直に伝えた生徒がいた。自分の気持ちを語った生徒は、生活に落ち着きを見せ、成長した様子だった。

「語る」ということが協議されたなかで、2つのことを思いだした。

1つは、「カミングアウトは命がけ」ということである。性的少数派の方の言葉であるが、仲間とともに「語る」ためには、安心して語ることできる仲間づくり、状況が必要ではないか。

2つ目は、「一番言いたくないことは、一番わかって欲しいこと」ということである。北九州市の人権バンドの1曲のフレーズであるが、子どもたちに語らせる前に、今一度、私たち大人が問い直さなければならないのではないか。

明日は、時代に合った人権・同和教育を創造する2日目にしたいと思う。

(2日目)

－報告3－③

「生徒の成長を包み込んで共に育つ学校」

(京都府人教)

－主な質疑と意見－

熊本 報告にある A さんの保護者の思いには、具体的にどのようなものがあったのか。保護者の言葉はどのようなものだったのか。徐々に、気持ちを伝えられるようになった A さんは、何といったか。保護者の願い、A さんの言葉を、教師がどのように拾いあげたのか。

鳥取 A さんの小学校は、どのようなものだったか。例えば、なぜ、発達検査を保護者が拒否したのか。小学校では A さんがどんな思いで過ごしてきたのか。中1までの実態を、更に知りたい。

報告者 母親が不安であると伝えてもらえれば、もっと力になれた。「AはAのままよい。個性です」と言い切った。何が不安なのか真意がつかみづらかった。そして家庭訪問を繰り返した。

本人の思いについては、調子が良い時に会話をした。「学校で苦手なことは何か？」という問いに、「勉強」と答えた。人と関わるのが苦手だと予想していたが、「勉強が、いつ頃から分からなくなったのか」という教師の問いに、「始めから」と答えた。「小学校の入学からか？」と尋ねると「うん」と答えた。尋ねたことにオウム返しが多く、真意をくみ取ろうとしたが、捉えにくいことが多い。中学2年中ごろまで、文字を書くことを見たことがなく、Aさんが何を身に付けてきたのか、分からない状況だった。

発達検査を拒否したことの理由を尋ねると、母親を追い詰めることになるので、尋ねていない。母親を追い詰めないように、配慮してきた。

小学校からは、数時間の登校で、不登校であると連絡はあったが、声かけはあったが、アセスメントの内容があがってくることなどはなかった。

奈良 なぜ、学校に行けないのか、悩みながら、子どもに向き合っている。

中学2年次に、Aさんの周りの仲間が変わり始めたところがあるが、Aさんと周りの仲間が変わる手立てや背景などはなかったか。Aさんと仲間が、どのようにつながっていったのか。声かけなど、教師の手立てなのか、自然につながっていったのか。

大阪 教師全体が同じ尺度で、保護者の気持ち、家庭に寄り添うようになったのか。

大阪 2年生の3学期「学校にできるだけ登校させたい」と伝えたところが、保護者の意識が変わったところである。支援を拒否してきた保護者に、何があって、「登校させたい」と伝えてきたのか。

報告者 保護者がAさんを学校に送り出そうという気持ちになったのは、学校・教師の姿勢の変化であると思う。Aさんに適切な支援を受けさせなければと考えていたが、母親の強い思いに寄り添わなければと教師が変わった。他の子どももいるなかで、Aさんと母親が、手をつないで学校に来る様子に、学年の教師で変わっていった。制服や学校指定のカバンもあるが、私服や指定外のカバンで登校することも認めた。別室登校であったが、母親と会話をするなどの受け入れが母親の気持ちに変容をした。男性教師が家庭訪問した後に、父親との連携が図られるようになり、2年最後の三者面談では、両親そろって、面談ができた。母親にとっても子育てのしんどさが、分担されたのではないか。父親も学校の教育方針に理解を示された。子どもたちがAさんと関わる方法が分からない様子だった。そこで、教師が行動で示そうとした。「一緒にやろう」という姿勢を見せた。掃除や日直など、関わり方を伝えながら、関わる意欲を喚起した。

愛媛 小学校で特別支援学級の担任をしており、交流学級在籍の子どもともかかわっている。交流学

級のその子には知的な障害はないものの、とにかく泣いている子どもがおり、担任をしている子どもとその子との3人の関係性を増やした。今、小学校3年で、できること増やしている。自立・社会参加ができるようにと考えている。不登校傾向・低学力傾向であったりするなど、中学校の学習に参加できにくい、学力を身に付けさせる素地が足りない場合、個別の指導をどのようにして保障していったのか。教科担任制のなかで、教師間でどのように共通理解・連携をとったのか。保護者支援・家庭支援として、他機関との連携や福祉サービスを受けたのか。また、その後小・中学校との連携に変化はあったのか。

報告者 Aさんは通級指導教室に在籍しているが、生活体験が乏しく、家庭と連携しながら、社会生活を支える学習をしている。さらに具体的に家庭と連携を図る課題がある。小・中学校との連携については、方法を改善・工夫する途中の過程である。個別支援の体制は、年度によって異なり、特別支援教育支援員などマンパワーが不足してしまう年度もあるが、できる限り個別支援を図っている。教師間の連携については、Aさんの話題について日々職員室で話されている。

－報告3－④

「解放子ども会への協働子育てからの『自立自闘』をめざして」～小学6年生リーダー研修「人権のふるさとを訪ねる旅」のとりくみを通して～

(福岡県人教)

－主な質疑と意見－

奈良 この報告が一番聞きたかった。中学校1年生で部落問題学習をやってリーダー研修、平和学習なども行っている。どれだけ当事者意識を持てるのかが大事。地区の子だけが部落問題学習をすればいいというわけではない。自分に対する問い、目を背けてきたこと、部落問題に無関心だった。

広島 この活動の主体はどこなのか？

鳥取 学校の関わり、ムラの子が一人だけの場合、その子の思いを学校全体にどう広げていくか？

報告者 指導者が中心に内容を企画する。学校との連携が欠かせない。2週間に1回、管理職、同推と話し合いを持っている。

－意見交流－

福岡 奈良にも参加しました。授業もしました。私達がどれだけ当事者意識をもっているのか。本気になれているのか。うちの小学校では年に3回部

落問題学習を計18回やっている。地域の方と協力して内容を作り上げてきた。必死に語る子どもたちの背景に差別があるのではないだろうか。担任も奈良に同行した。子どもの動揺を心配した。子どもが揺れたときにどれだけ傍にいろか。

福岡 今年度子どもたちを奈良に連れて行く予定です。子どもたちと共に学ばせてもらっている。自分もセンターに通っていた経験がある。発表する際に、ムラの子(中1)は学校で一人。大切な学習をしてきたので、感じているからその子の個性を潰さないでほしい。「立場を自覚させることが、本当にいいのだろうか」と考える。つらい思いをさせたい親はいない。ムラの間人として本当はやりたいたいわけではない、差別がある現実を子どもの世代に伝えるのは呪でしかない。地区外の子たちに部落問題学習を広げてほしい。

福岡 昨年引率した者です。報告会のときに、「自分のことが好きですか？」と訪ねたんです。その意図は奈良の旅を通して清原さんの話を聞いて「自分を好きになりなさい」が心に残ったと感想に書いていた。清原さんは「ありのままの自分を好きになりなさい」と言った。子どもたちに教師が有りのままの自分を好きだと伝えることを大切にしていきたい。

福岡 クラスの子ども達とつながることができている。以前と比べ表情が明るくなった。仲間づくり、子ども同士をつなげることは必要だけど、子どもたちに自信をつけてパワーアップさせる。レポートのお子さんにおいても保護者さんもお苦労されたのではと思います。親とつながることは重要だと思う。4年生の人権学習の中で解放子ども会のことを伝える学習がある。いわゆる立場宣言になると思います。胸を張って伝えることを親と話し合っている。その思いを受け止められるクラスづくりを共有しながら進めていきたい。

福岡 進路保障は同和教育の総和であると言われていますが皆さんはどうお考えですか？一つは学力保障、目指す未来へ向けた力、もう一つは解放運動。2つが揃って進路保障だと思う。部落問題学習をする際にムラの方に協力することは、10

0%可能です。他の地区では反対されるケースがある。学校教師が支部の活動をしているという誤解があれば解きたいと思います。学校は地域と一緒に活動する必要があると思います。異動してきた教職員への研修、識字学級への学びもあります。長い時間をかけて培ってきた信頼関係があります。誰が指導しているのかは3者で行っているというのが実情です。仲間も増えました。未組織の家庭もあり、つながってほしい思いはあります。学習会に来てない子が差別に合うことを一番心配しています。担任で人権学習に対する温度差が出るのが心配です。

福岡 現在の小学校に赴任して2年目、自分の中で変わったことについて話します。部落問題を始め水俣病のことなども学習してきました。自分自身は差別に対して考えることがなかったけど、今の学校で子どもたちと人権学習に取り組みを行ううちにおかしいことに気づくようになってきた。無くしていかないといけない。そのためには教育が大切だと感じた。この学習もこれまでの積み重ねがあるから実現できていると実感している。幸せなことだと思っている。

福岡 6支部の指導をしてきた立場です。学習の準備をする段階で子どもを起こすときに考えました。地域に関わりながら自分の人生の一部となっている。これからも関わり続けていこうと思っています。出会って知ったことに責任を持っている。10年後20年度にこの子達がどうなっているのかを見届けたい。亀岡市のAさん、ずっと関わっていた人はいたのだろうか。その場しのぎの対処では限界がある。自分の差別体験いつまで語らせるのか、悔しい。会場に来ている人に対する期待、変わらないのは自分自身である。部落差別を受けてはならない、させてはならない。

兵庫 「差別されるために生まれてきたのではない」そのとおりだと思います。お母さんが語れないのは、子どもは生まれたときから否定からはじまる事が多くて辛くなる。子どもは学校に通うようになってから変わります。できないことのマイナスイメージ、できないからほったらかし。障がい児

にとっての学力は社会に出ることの力、人嫌いにならない、「普通になりたい」という言葉が一番つらい。自分に自信を持ちたい。簡単には変えられない。

大阪 被差別部落出身の教師です。相手の保護者から差別に会いました。そのとき、「出たー」と思いました。それは学習をしていたから立ち向かえました。被差別の子に指導していたから対応できた。友人は同じ学習を受けていたのに「部落に住みたくない」と言った。理由は「勉強は面白くなかった。お前らはいいかもしれないけど俺等は悪者にされている。」結婚前に妻は母から包丁を突きつけられた。部落差別の被害者は妻であり母だった。地域外の人にも差別にあう。SDGsの11番目に『住み続けられる街』があります。毎年子どもが激減していた。子どもたち、好きな街がなくなるのは嫌、いろんなアイデアをだしてくれた。フィールドワークに連れて行こうとした(公開研小学6年)。「雨のときどうする?」と言われ結局体育館で行った。勉強嫌いな子たちが紹介するための手法がわからないから国語の勉強を始めた。自分たちのために勉強を始めた。算数でデータを扱う。地区の子地区外の子も一緒に学びを深めていく。

Ⅲ 総括討論

協力者 これまでの討論で「今とこれから」というテーマに沿って、議論してきた。当事者に「いつまで語らせるのか」という発言もあった。皆さんから次々と「事実と実践」が語られる。「ここだから今だから言える」「居場所」「居人」の議論もある。このような点も含めて、総括となる討論をお願いしたい。

鳥取 大阪の方が言われた、友人の「部落問題学習がマイナスイメージ」という言葉。鳥取では部落のための人権学習とか、ムラの中でも「人権学習をしなくていい」と言われた。自分が受けてきた学習に良い思い出がないから、地区外の方も。人権学習が本当にためになるプラスになるものにしていかなければと思う。進路保障というのは、被差別の立場にある子が卒業してもずっとつながれる、一緒に闘える人間関係、仲間づくりを保障していくことではないかと思う。インクルーシブ教育は進路保障にすぐくつながっている。

滋賀 熊本の報告をきいて、担任を支える学校の

体制が大切であり、大阪の報告から、地域との取り組みがあって、安心して自分のことが語れるのだと思った。前任校で部落問題学習を基盤としている学区で小6合宿があり参加した。仕事・つながり・食文化の3つのキーワードがあった。その小6合宿時の子どもたちが、全国高校生集会(近江八幡)で「ここに来ている先生やおとなの人たちは本気で差別をなくそうとしているんですか?」という投げかけをしていた。我々がその思いを持ち帰ってこどもと向き合う必要がある。

報告者(大阪) 本日の福岡の報告を聞いて、部落問題学習をするときに、ムラの保護者に事前に学習のことを話すことを思い出した。家庭訪問をする、うちでは言えないから頼むと言われた。人から人に受け継がれている想いに胸を打たれた。と同時に、いつまでもムラの子が語るのではなく、地区外の子が怒りをもって部落問題を語れるということが大事だ。校則や生徒指導について、人権意識を反映させて、制服や髪型、制服の値段、制服の質、トイレ、ジェンダーの学習と環境の矛盾を考えることが大切だと思った。アクセサリは諸外国では幼少から身につけているものであり、多文化共生、多角的な視点でアプローチする必要性があるのでは。校則とか環境が人権学習と矛盾しているのであれば見直す、学校でも日本社会においても議論されていくことが重要だと考えている。

愛媛 福岡の解放子ども会の報告を聞いて私も熱くなった。愛媛では1つ2つしかない。なぜその立場の自覚・宣言をするかという理由は、命に関わるからだと教えてもらった。その中で気になっていることは、子ども会に所属しない子どもが増えてきていることだ。市内ではルーツがある子はたくさんいるのに学校が把握できない。プライバシーの問題があるためだが、把握できないのに子どもたちを守れるのか。全国的に増えているのではないか。起こったときに対応できるためには事前に把握して連携して備えておかなければならない。

大阪 福岡の報告で、母親としての気持ちがよくわかる。熊本の報告で、「この地区はこわいとこや」とあった。でも、はたらきかけによって、その人は変わった。(2本目大阪の報告に関わって)この学年の最後の部落問題学習で、地区外の子が話してくれた。「私は広島原爆の話、戦争の話、部落問題学習など、毎回お母さんに報告している。お母さんは何も知らなかった。私は『何をしていたの!』』と言った。それだけ大事な勉強だから伝えたけど、母親たちは何を学んでいたのか?」と。そこが一番問

題だと思う。地区がある学校、地区がない学校もあるが、先生に言いたいのは、目の前にきつと課題を抱えた方がいて、そこから人権学習に入れると思う。そういうことをやっていって部落問題学習につながってほしい。そうすることで先生の視野がひろがって、いろんなことが子どもたちに伝わっていく。部落問題学習は大事だけど、その学校に応じた人権学習をしていただきたい。そうでないと、親が「何も知らん」という恐れがあるので、先生には取り組んでいただきたい。

福岡 ここで語らなかつたら後悔すると思って自分のことを語る。高校生時代から全同教に来ていた。母が同推だったので旅行感覚だった。涙、糾弾の先には「ムラの子をどうするか、これでいいのか」が論じられてきた。目の前に生きるか死ぬかの子がいたから、母は家に帰ってこなかった。母の生き方を見て、強い思いを感じてきたが、その時は、「私は大事にされてない、母は私を見てくれない」と思い、「自分は同和教育をしない教師になる」という間違っただけの考えをしていた。でも、出会いがあって現任校で最初の人権学習を行った時に、ムラの保護者に泣かれた。授業がうまくいった・いかなかったのではなく、ムラの保護者には「学校に託さないといけない思い」がやっぱりあるということ。だから「同和教育から逃げてはいけない」と思った。そして、自分も同推になった。一人のムラの子との出会いがあった。学年で人権啓発センターに行き、同和教育の本を見たその子に、「わたしって部落じゃろ？」と突きつけられて、何て返していいかわからなかった。その子はずっとそんな思いをかかえて誰かに言いたかった、でも言えなかった。現任校は親と一緒に作る人権学習をしているので、親が自分の子どもに被差別部落にルーツがあるということ伝えていて分かっていたので、私は「そうよ」と言った。「だから、こども会の活動も一緒にしたり、水平社の旅も一緒に行ったりしている。先生も一緒にがんばるけん！」と。結局子どもたちには「差別がある、許せんよね。でも、その気持ちをもっている私たちがつながれたことが力になってるよね！」と伝えた。京都の報告に関して最後に一つ、障害児教育は「本人ではなくまわりの子たちをどう育てていくか、という視点が大切」と同和教育を通じて学んできた。報告では「お母さん、どんなにつらかったらう」とあったが、私は「このお母さん、素敵やな」と思った。「Aとずっと手をつなぎ寄り添っているお母さん」に、私だったら「お母さん、すごいね！ようがんばりようね、素敵やね！」とい

う関わり方をする。反差別の集団づくりを大切にしていって、自分が担任してきた子どもたちには、「なんで、この子のこと知らんの？」とはたらきかけてきた。こども同士がつながるということを大事にしてきた。全国から差別をなくすために、今年ここに集えた。明日からの力になった。

協力者 自分を語るということが、いかに大切かが討議された2日間だった。報告のAさんと報告者の思い、そして会場の皆さんの語りにとっても感銘を受けた。自分は大阪出身で、母方のルーツは大牟田。大阪でも「にんげん」という副読本を使った学習があり、炭坑のこともあった。こどもの時、他の教科はあまり発言しないのに、その「にんげん」の時間だけよく発言していた。「どう乗り越えてきたか」「どう闘ってきたのか」「それが誇りなんだ」と学んできた。そのことをこれまでの皆さんの発言から、強く感じた。滋賀でも「結局、自分はどうなのか」「自分を問う、自分と向き合う」ということをいつも話す。討論を経て、「差別をなくす」ことは、誰にも関係があり全員の問題だということであらためて認識した。

－2日目のまとめ・振り返り－

協力者 大会前に事前に送られてきたレポートを読む中で、「もっと聞きたい」ということがたくさんあった。この2日間の分散会で、しっかりと「聞き」「話す」ことがとても大事だということを確認することができた。

水俣事件で活動された川本輝夫さんは、「情熱とは、事あるごとに自分の意思を表明することである。」という言葉を残されている。私もこの言葉を大事にしているが、本分散会の4本の報告では、「自分がどんな意思を持って取り組んでいるのか」、「私たちが大事にしていくことは何なのか」がしっかりと示されたように思う。

そして「語ること」が、二日間を通して話題になった。「しんどいことをいつまで語り続けなければならぬのか」という大事な発言を受けとめながら、私は「語っていただきたい」と思っている。それは、語っていただいた事を、私たちの方がどう受けとめるのかということが大切ではないかと考えるからである。私の住んでいる地域でも、ハンセン病問題学習に取り組んでいて、回復者のお話を聴く学習を大切にしているが、お話しをして下さる方が少なくなっている。ある時に回復者の方のお話を聴く学習会を開催したら、先輩が「あなたは、どんな目的で話を聴こうとしているのか？あなたは、何を伝えたいのか、何を聞きたいのか、自分がなぜ何故ハンセン病問題にかかわり続けるのか、そこを明確にししないと、被差別の立場の当事者を利用していただけではないのか」と指摘された。その出

来事は、もう一度「自分の立ち位置をはっきりさせなくてはならない」ということに気づかせてくれた。「語る」方の、思いや願いを受けとめる私自身の問題なのである。今日も協議された中にあった、「語り」を聴き、「返していく」やりとり(つながり)を、私も会場の皆さんと共に、大切にしていきたい。

最後もう一つは、分散会の協議の中では出なかったが、「働き方改革」が学校現場にはすごい流れで進んでいる。子どもとの時間を創ることを目的としているが、時間外在校時間を短縮することが目的化している感がある。その中で、先輩たち、私たちが培ってきた同和教育・人権教育実践の形骸化に危機感を覚える。今年の進路保障分科会に参加する前に、30年前の全同教で出版した『学校同和教育実践講座 LUMIERE 進路保障の課題と実践(1993 解放出版社)』を再読した。その中に実践報告が載っている先輩に「今の働き方改革の中で私たちが本来すべき仕事をどんどん減らしているのではないかとたずねたら、「目の前に転んで足を擦りむいている子どもがいたら、ほっとけないだろう。絆創膏を貼ったり、頭をよしよししたりせん(しないと)と。子どもたちの最前線にいるのは自分たちである。それをせずして、何のための学校なのか、何のための教員なのか」と言われた。

そんな話を重ねながら、この分散会で再確認することができた。目の前の子どもたちのその最前線にいる覚悟というか、明日からも「やっていかないといけない」と思っている。

また来年会いましょう。